Ｎｏ．５３５【２０２２年１２月２３日配信】

雪国に多いりんご畑と環状列石（担当：児玉大成）

こんにちは。文化遺産課の児玉です。

「忍路丘ストーン・サークルゆ降りくれば、リンゴ畑に月のかかれる」と詠んだのは、北海道を中心に環状列石の研究に取組んだ考古学者の駒井和愛（こまいかずちか）（1905−1971）です。北海道小樽市にある忍路（おしょろ）環状列石など、「りんご」のできるところに環状列石が存在していると周囲に注意を促し、自らの研究データを集めていたといいます。

忍路環状列石（北海道小樽市）

日本の南北性を示す作物は、寒地性の「りんご」と暖地性の「みかん」で、りんごは長野県以北の東北日本、みかんは主に西南日本に分布しています。りんご栽培地は、技術的環境により東北日本に分布することになり、さらに気象条件と生育の研究や品種改良を重ねることにより、積雪寒冷という厳しい環境においても有利に展開してきました。ですので、駒井が詠んだ、りんご畑と環状列石との相関性の指摘は、両者が雪国に多いという点で、全く無関係ではないことがわかります。

雪は、大陸の高気圧から吹き出される低温の大気が、日本海側で大量の水蒸気を供給されて湿っぽくなり、それが日本列島を縦断する山脈にぶつかって舞い降ります。したがって、日本列島の日本海沿岸を中心とした地域が寒冷積雪地となっており、現在は豪雪地帯対策特別措置法（昭和 37 年制定）で定めた「豪雪地帯」として指定されています。北日本の環状列石は、縄文後期のものがほとんどで、いずれも「豪雪地帯」に分布しているため、この時期の環状列石については雪国に多いという傾向が認められるものの、「特別豪雪地帯」に指定されている北陸地方には、環状列石がほとんどみられません。

また、環状列石を構成する石材運搬の視点で雪との関連性を考えると、条件さえ整えば雪上で橇を用いる方法も想定されます。雪国には、深い雪を歩くという意味で「雪を漕ぐ」という表現がありますが、ひどい時には腰ほどまである雪の中を歩くこともあります。このような環境で、重い石を載せた橇を曳くのは非常に重労働で、それは縄文人にとっても同じことが言えるでしょう。